

”叱る、怒る、赦す、待つ“

幼児時代は、何もかもまるっきり初めてです。ですから大人は生活のすべて、食事の仕方をはじめ、歯の磨き方、靴の履き方など、親切にわかりやすく知らせていかねばなりません。

2～3歳ころまでは好き勝手に動き回りますが、これは本能のままに表現しているのであって、その動機に善意も惡意もありません。

ですから「なんでそんなに走るの！」「うるさい！」と叱るのは全く的外れで、意味がありませんし、子供には理解できません。「叱る」を辞書で引きますと「声を荒立ててとがめる、攻める」とあります。叱るときの大人の感情は怒りに近く、羨^{うらやま}とは程遠いというのが実際です。

また「叱る」は内容を知らせるより、罰を与える要素が強いです。ですから子供にしてみれば、なぜ自分が叱られているのかわかりません。反抗する力がまだ育っていない幼児にとっては理不尽という他ありません。

この時期大人に求められるのは子供の成長を見守り「待つ」ですね。

そしてこの時期最も必要で大切なのはやはり、生活習慣です。繰り返しになりますが「早寝、早起き、朝ご飯」。これも人格形成の根っこです。

そして「自分の身の回りのことは自分でする」という習慣です。

ただし「4歳だから自分でしなさい」とつき離すのではなく、自分でできるようになるまで、わかりやすく手順を示し、繰り返し、何度も同じことを教えます。これは赤ちゃん扱いではありません。

5、6歳になると「叱らねばならない」ことが起こってきます。その基準は「明らかに嘘だとわかるとき、弱い者いじめをした時、面白半分に友だちをたたいたり、突飛ばしたりするとき、また友達をバカにするようなことを言ったり、からかったりするとき」。

気が付かれたら「〇〇ちゃん、あなたは間違っているよ。止めなさい。」ときっぱりと伝えましょう。

そんな時は、どうぞ真剣に、優しく子供さんと向き合ってくださいね。

愛情をもってさとしてあげれば、必ず子どもさんには伝わりますよ。

「望みのあるうちに息子娘を諭^{さと}せ。死なせることを目指してはならない。」